

の劈頭に「站赤者國朝驛傳之名也」と見えるやうに、<sup>③</sup> 站赤即ち *jamci* といふ蒙古語は驛傳といふ漢語に對して用ゐられて居つたものであるからである。王國維氏の如きも勿論かく考へて、余が抄寫した徐松本について、「星伯先生所鈔、〔經世大典〕驛站一門尙存」といひ、また「惟〔經世大典〕驛傳一門卷帙頗大、原稿今在俄都聖彼得堡(莫斯科)博物館」云々というた。然るに怪しむべきは、經世大典序錄にはこの門の名が「驛傳」と記されて居ることに、永樂大典に收められてある所には、こゝに見るやうに「站赤」と記され、またその序文が兩者全く相異つて居ることである。元文類の編者蘇天爵は經世大典の編纂にも關與した筈であるから、本來「站赤」とあつた門名を「驛傳」と誤り、また本來前附せられた序文を誤つて、全く別個のものをその序錄中に收めたとは考へ得られない。今日普通に行はれてゐる元文類に譌字や錯簡の多いことは周知の事實であるけれども、それもこの疑問を解くに足るものでないことは言ふまでもない。然らば永樂大典所收の經世大典站赤門は、名稱の意義の相當るに拘はらず、その驛傳門とは別門では無かつたかといふ疑を生ずるであらうが、それも亦決して然らざる理由がある。何となれば經世大典序錄には序文の次に長短の小註を施したものが少くない。これらの小註は既に王國維氏が論じたやうに蘇天爵が元文類を纂修し、經世大典各門の序文を録出した時に、其の門に屬する記事を隱括して註付したものに相違ない。序錄の驛傳門にもこの小註が附せられてあるが、その各項は例に依り多くの訛奪は存するけれども、一々皆永樂大典所收經世大典站赤門の記事の抄出に外ならぬことが認められる。そうすれば序錄の所謂驛傳門は永樂大典本の所謂站赤門に外ならず、決して兩者が別門で無いことを知るに足るであらう。詮ずる所兩者の門名と序文との相異つて居るのは、一旦出來上つた經世大典が其の後更に手を加へられて、多少の改竄を見るに至つたが爲であ